

Kennedy Institute of Ethics at Georgetown University

ジョージタウン大学ケネディ倫理研究所 世界をリードするバイオエシックスの研究センター

執筆：大林 雅之 京都工芸繊維大学大学院 工芸科学研究科 教授

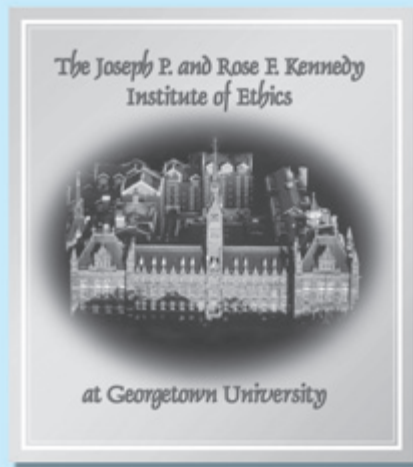
「21世紀は生命科学の時代」といわれている。そのことはまた「21世紀はバイオエシックスの時代」といってもよいことを意味している。なぜなら、生命科学は今や医療や産業への応用の可能性をますます広げており、生命科学研究にはバイオエシックス(生命倫理学)の議論が不可欠となっているからである。ここで紹介する「ジョージタウン大学ケネディ倫理研究所(Kennedy Institute of Ethics at Georgetown University)」(以下、ケネディ研究所)は、そのようなバイオエシックスの議論の在り方を象徴的に示してきた存在である。日本におけるバイオエシックスの取り組みを改めて考えるためにもケネディ研究所について我々は知らなければならない。

■ 設立経緯

ケネディ研究所は正式名称を「The Joseph P. and Rose F. Kennedy Institute of Ethics (ジョセフ P. アンド ローズ F. ケネディ倫理研究所)」といい、故ジョン・F・ケネディ大統領の両親の名を冠して、ケネディ財団の援助によって、1971年にジョージタウン大学(ワシントンD.C.)に設立された。この研究所は、ニューヨーク郊外に69年に設立されたヘイスティングス・センター(The Hastings Center)とともに、バイオエシックスの研究センターとして世界的に知られた存在になっている。70年代初頭は、特に遺伝子研究の発展が著しい時期で、遺伝子操作をはじめとする生命操作に対する倫理問題の提起もあったが、60年代の生命科学・医学研究や医療における人権問題の広がりも、この研究所設立への大きな要因になった。初代所長はカトリックの医師であるアンドレ・ヘレガースで、現在は法律家のマディソン・パワーズがその任を担っている。

■ 研究

ケネディ研究所の活動は、研究と教育とに大きく二つに分けて考えてみると、まず、研究では、理論研究と実践的な研究がある。理論研究では、代表的には生命倫理の4原則に代表されるような研究であり、その代表的研究者は、トム・ビーチャム教授であり、その代表的著作(ジェームズ・チルドレスとの共著)である『生物医学倫理の原則(Principles of Biomedical Ethics)』は教科書としても広く知られている。近年は、その原則主義に対する批判も広く行われるようになってきているが、生命倫理、医療倫理の新しい展開における先駆的な役割を果たしてきた。実践的研究としては、臓器移植や遺伝子操作の具体的な議



ケネディ研究所を紹介するパンフレット。現在、研究所は高い塔のある建物の中にある

論をリードしてきたように、生命科学・医学研究の具体的な発展に即して、議論の枠組みを提供するという役割を担ってきた。そのような研究のテクニカルな面も踏まえた議論は実験系の学術雑誌にも掲載され、現場の研究者との議論も可能にしてきた。脳死・臓器移植問題では、ロバート・ヴィーチ教授、遺伝子治療ではレロイ・ウォルターズ教授が大きな役割を發揮した。ここで研究所のメンバーについて述べておくと、発足当初からのメンバーである、ヴィーチ教授、ウォルターズ教授、ビーチャム教授に加え、現在は、法律家のパワーズ教授、フェミニズム倫理学からのマーガレット・リトル教授など多士済済のメンバーでアップツーデートの議論を展開している。筆者が留学の当時の所長であった、エドモンド・ペリグリノ教授は、所長退任後はジョージタウン大学に別に創設された高等倫理研究所の所長を続けられ、近年は大統領の諮問機関であるバイオエシックス委員会の委員長としても活躍された。

上記の研究所の初期の成果の代表は、なんといっても78年に出版された『バイオエシックス百科事典(Encyclopedia of Bioethics)』である。この成果がバイオエシックス研究のパラダイムを形成したといっても過言ではないであろう。この事典は、その後95年に第2版、2003年に第3版が発刊され、バイオエシックスのアメリカでの発展をいきいきと示している。日本でも翻訳が期待されていたが、ようやく、この1月の末に丸善より出版された。もし、この翻訳がもっと早く日本で行われていたら、日本でのバイオエシックスの状況も、軽々にはいえないが、大いに異なっていたのではないかと考えている。

■ 教育

教育でも、いくつかの特徴が挙げられる。まず取り上げたい、大きな点は、大学院教育である。前述した研究の進展は、また教育の進展でもある。バイオエシックスのような現実に社会に起こっている問題を扱う分野では、具体的な事例に即した研究が必要である。生命科学・医学研究と医療を人間・社会の中で見据え、そこにある問題を捉える枠組みの提示とともに、その問題への対応を議論できる人材の養成が必要なのである。この意味での実践のモデルを示してくれているのも、ケネディ研究所である。特に大学院教育においてはさまざまなバックグラウンドを持った大学院生が所属して、皆、ここで学位を取得後はそれぞれが持つ現場に戻り、バイオエシシスト(bioethicist)として活躍していくことを目的としているのである。この卒業生は、全米各地の大学、病院において、バイオエシックスの2世代目として活躍している。また、毎年6月には、1週間の集中バイオエシックス・コースが開催され、世界各国から参加者が訪れ、修了書を得て、そこで得た知識や技術を所属先において活用しバイオエシックスの実践を拡大する大きな力となっている。

■ ケネディ研究所と日本とのかかわり

筆者は88年夏から89年春にかけてのおよそ9か月間、客員研究員として勉強させていただいた。ほぼアカデミック・イヤーを過ごさせていただき、先生方の講義にも参加させ

ていただいた。各コースは、アメリカの大学では常であるように、事前に周到に用意されたシラバスに基づいて、近くのKinko'sで指定されて購入したリーディング・アサイメントを相当量読んで出席するというものであった。先生の講義の後は、ディスカッションを中心に授業は進められていて、筆者は慣れないながらもバイオエシックスの議論の在り方を身にしみて実感していたものであった。また、実際にジョージタウン大学病院で起こっている倫理問題を話し合うセミナー（「エシックス・プラクティカム」と呼ばれていた）もあった。ペリグリノ先生が主催されており、大学病院の医師、看護師、大学院生らが多く参加していた。しかし、実をいうと、もっとも勉強になったのは、当時研究所のアジア・プログラムのディレクターをされていた木村利人教授の研究室を訪ねてお話を伺うことであった。というのも、ここでは日本語で勉強ができたからである（！）。海外生活の長い先生ではあったが、70年代の終わり頃から先生はジャーナリストの岡村昭彦氏とともに日本にバイオエシックスの導入の活動を開始されており、その影響の広まりの中で、筆者のようなものも留学の機会を得たということができる。筆者の留学は日本人としては早いほうであったが、その後



1988年当時のケネディ研究所。ジョージタウン大学の正門近くにあった

多くの日本人研究者、ジャーナリスト、医師、看護師らの訪問研究の増加が見られたが、皆、木村先生の尽力でケネディ研究所での研究で得た成果を日本にもたらしその後活躍しているという次第である。木村先生は87年から早稲田大学教授も兼任され、毎年多くの学生がケネディ研究所を訪れていた。木村先生はしばらくケネディ研究所にも在籍されていたが、その後、早稲田大学を本拠地とされてからはケネディ研究所の先生方を日本に招き、日米のバイオエシックスの架け橋となっていた。

ケネディ研究所と日本人のかかわりについてももう一つ特記しておくべきことは、故武見太郎元日本医師会長との関係である。武見先生は、前述した『バイオエシックス百科事典』の初版において、1項目を担当し、日本



ジョージタウン大学でのセミナーの様子。中央右がペリグリノ先生

の伝統的な医療の倫理について論じている。武見先生は、かねてより、人類の生存についての科学的考察を模索しており、バイオエシックスについてもいち早く言及し、医療資源の配分の問題に関心を寄せていた。バイオエシックスへの問題意識は、その後「生存科学」の提唱につながったが、その遺志を継いだ1人である、故土屋健三郎元産業医科大学学長が、産業医科大学に在職していた筆者にケネディ研究所への留学の機会を与えたということがある。バイオエシックスと生存科学とを結び、バイオエシックスの語を造語したファン・レンゼラー・ポッターを思い浮かべるが、武見先生の先見の明に驚かされるとともに、深い因縁を感じざるを得ない。

■ ケネディ研究所の活用

ケネディ研究所はさまざまなサービスを提供してくれている。ケネディ研究所にはメンバー制度があり、メンバーになるとさまざまなサービスを受けることができる。もちろんメンバーではないとしても利用は可能である。前述したような教育機会の提供もなされているが、定期出版物としては『ケネディ倫理研究所ジャーナル』が発行されていて、会員登録をすれば送ってくれる。また、インターネットからHP*に入れば、ケネディ研究所が誇る、ライブラリーの検索システムも利用できる。ケネディ研究所のライブラリーは、アメリカの国立医学図書館のプランチにもなっており、書籍、雑誌、新聞記事などの生命倫理関係の文献の検索が一般に開放されていて、世界中からアクセスできるようになっている。以前は検索サービスにも制限はあったが、今日では自由に利用できる。このようなデータベースの開放はアメリカの知的財産に対する考え方を示す一例として我々は大いに学ぶ必要があるとともに、バイオエシックスの学問としての特徴も表していると考えられる。

また、このライブラリーには、特別な領域の文献コレクションもあり、本誌の発行元の国際長寿センター理事長森岡茂夫氏のコレクションもその一つに収められていること

を記しておくかねばならない。

■ おわりに

バイオエシックスにおける研究センターの必要性

ケネディ研究所は前述のようなさまざまな特徴を持ってバイオエシックスをリードしてきた。しかしながら、やはり、アメリカという社会状況の中でその活動の特徴が際立つのであり、国際的な貢献はもちろんあるとしても、日本のバイオエシックスの問題を扱うことには限界がある。医療や科学はそれを支える人々の文化という文脈で見えていくことが必要であるからである。そこで、ぜひとも必要なのは「日本におけるケネディ倫理研究所」である。これまで、日本の大学や研究機関にバイオエシックスにかかわる研究活動の組織の試みはあるがケネディ研究所ほどの役割を担うものはなかった。バイオエシックスに関連する問題が生じる度に、日本でも政府の主導で審議会などがもたれて対応しているが、十分な役割を果たすことができていない。そこにある大きな問題点の一つが、組織だった研究機関の不在である。アメリカでのバイオエシックス政策の進展には、国家的な委員会と、そのもとで形成された研究者集団と膨大な報告書の蓄積が大きく影響しているのである。日本では、審議会方式とも呼べるものがバイオエシックス政策の基本となっており、他の審議会と同様に、問題領域に関連する既存の専門家とさまざまな意見を代表するという有識者、評論家、メディアの代表などからつくられてはいるが、日本という社会における基本的な生命観や価値観への問いかけがないままに議論されているのではないかという印象を免れないのは筆者のみか思うことであろうか。

アメリカでのやり方が、すべてとはいわないが、少なくともバイオエシックスのような新たな研究領域であるとともに、今後の社会の在り方を決定づけていくような議論は、しっかりとした研究基盤と社会的合意形成への役割を担っていかなければならない。このことが、ケネディ研究所から日本が学ぶべき多くのことの中の特に緊急性の高い選択肢の一つであることを改めて銘記しなければならない。

* <http://kennedyinstitute.georgetown.edu/index.htm>

大林 雅之 Masayuki Obayashi

1950年生まれ。横浜市立大学文理学部卒業。上智大学大学院理工学研究科生物科学専攻博士後期課程単位修得。ジョージタウン大学ケネディ倫理研究所客員研究員、山口大学医学部教授、川崎医療福祉大学教授などを経て、2004年8月より現職。著書に『生命の淵——バイオエシックスの歴史・哲学・課題』（東信堂）などがある。